日本建築学会技術報告集　第19巻　第43号，1091-1094，2013年10月
AIJ J. Technol. Des. Vol. 19, No.43, 1091-1094, Oct., 2013

熊本県五木村における板倉の建築構法

A RESEARCH ON CONSTRUCTION SYSTEM AND LOCATION OF STOREHOUSES IN ITSUKI VIL. KUMAMOTO

小林久高 ――― ＊1　　濱　定史 ――― ＊2

Hisataka KOBAYASHI ― ＊1　　Sadashi HAMA ――― ＊2

キーワード：
五木村，板倉，木造構法，群倉

Keywords:
Itsuki, Wooden storehouse, Wooden construction system, Group of storehouses

In Itsuki Vil., characteristic wooden storehouses are distributed. We investigated about the wooden structure system, how to use storehouse, and the location form of storehouses. The thing stored on the inside is cereals made from the shifting cultivation. Pillars are built on stones and the floor level is very high. The structure system looks like the building of other regions such as Hachijyojima and Amamioshima.

1．はじめに

高倉は南西諸島を中心とした島嶼部に多く分布し、その特徴的な構法についての報告が多く見られる。それに対して比較的床高の低い板倉については具体的な調査報告が少なく、分布の傾向も整理されていない。しかし、高倉の変形過程と捉えることができる板倉について、その分布や構法を確認することは木造構法の文化的な流れを検討する上で重要である。本報告の調査地である五木村に現存する板倉においては、他地域の高倉との構法的な共通点が確認されることから、貴重な建築的資料と考えられる。

九州の山間部における板倉については、石原による五家荘地域の概要に関する報告[1]が初出であり、それに次ぐ野村の報告[2]では五木村および五家荘地域の板倉が波照間島の板倉と類似していることが指摘されている。熊本県教育庁による報告[3]では床の高い特徴的な板倉の存在について言及している。川島[4]は椎葉村における板倉の写真を示し、仕口の形式が奄美大島の住居や八丈島のオクラと同様であることを指摘している。後年の五木村による調査[5]においては、倉の簡易な平断面図が示され、群倉配置について述べている。

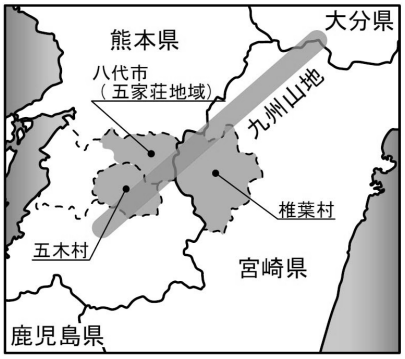

図-1　調査対象地域

本調査においては九州山地南部に位置する熊本県五木村、八代市の五家荘地域、宮崎県椎葉村を巡検調査の対象地とし[注1]（図-1）、板倉が比較的多く確認された五木村を詳細調査の対象地として選定し、実測調査（表-1）、聞取り調査[注2]、配置図の作成を行なった。五木村においても確認された板倉の数は計9棟に留まっており、現存数が少なく、詳しい話者も少ないため充分な資料の提示と考察を行なうことは難しい。しかし近年のうちに消滅する建築物であろうことを考慮し、その特徴的な建築構法について現状の成果を技術的資料として報告する。調査期間は、椎葉村：2006.12.26-27、五家荘・五木村：2011.06.06-08及び2011.10.27-30である。

2．地域の概要と板倉の分布

五木村は九州山地の南端に位置し、面積の多くを急峻な山地が占める山間の高地である。年平均気温が15度以下となり、夏は涼しく冬には降雪もみられる。

戦前における社会構成は、大部分の土地を所有するダンナ層とその土地を借用して焼畑を行なうムラ人の関係が基本で、その関係に

表-1　五木村における実測調査対象板倉一覧

板倉No.	所在	平面規模（芯々,mm）		柱間寸法（芯々平均,mm）		床高（mm）	桁高（mm）	入口方向	室数	内部間仕切り	船枻造り	輪薙衲	五平材の使用	注記
		梁間	桁行	梁間	桁行									
1	五木村梶原	3,655	4,666	1,218	1,166	713	2,722	妻入	1	3枚	○	○	○ 大引	
2	五木村梶原	4,041	6,055	1,519 (1,805)	1,511 (1,018)	598	2,645	平入	2	1枚	○	○	○ 大引	濡縁あり
3	五木村梶原	3,343	7,411	1,671	1,591 (1,044)	560	2,634	平入	2	2枚	○	○	○ 大引	内部通路あり
4	五木村白蔵	4,077	6,018	不明	2,006	577	2,591	妻入	不明	不明	○	不明	不明	内部不明 改造大、茅葺き
5	五木村白蔵	3,643	5,460	1,214	910	616	2,636	妻入	1	なし	×	○	×	
6	五木村平野	3,965	3,985	1,321	1,328 (1,992)	490	2,480	平入	1	1枚	○	×	○ 梁	

*1　島根大学大学院総合理工学研究科　講師・博士（デザイン学）
（〒690-8504　松江市西川津町1060）
*2　東京理科大学工学部建築学科　助教・博士（デザイン学）

*1　Assistant Prof., Interdisciplinary Graduate School of Science and Engineering, Shimane Univ., Dr. Design
*2　Assistant Prof., Faculty of Engineering, Tokyo Univ. of Science, Dr. Design

基づく奉仕や物納が行なわれた。またシューギと呼ばれる村全体での相互扶助や、親戚のカセイによる協働も行なわれた。

戦前における生業は、山地で行なわれる焼畑「コバサク」による雑穀[注3]の生産が主であり、それに加えて木材の搬出、炭焼き、狩猟などの多様な森林資源の活用と牛馬の生産が行なわれた。明治35年における土地利用[注4]（**表-2、図-2**）を見ると、山地における焼畑面積が村の面積全体の４割程を占めていることが分かる。焼畑による耕作地が集落から遠いため、サエと呼ばれる出作用の住居を建てていた。戦後の造林事業により植林による木材生産が増加し、またシイタケ等の換金作物の生産など生業が多様化している。

板倉には特別な呼称はなく「クラ」と呼ばれており、かつては村内に広く分布していたと思われるが、現存が確認されたのは梶原、白蔵、平野の３集落、伝承として倉の存在が確認されたのが九折瀬の１集落のみであった。

３．板倉の立地と利用法

3.1 板倉の群倉立地

梶原、平野の両集落においては、「群倉」による立地が確認された。これは、火災による貴重品の被害を防ぐ等の理由で板倉を主屋から離して集団で建設する配置形式で、奄美、沖縄、対馬等の南方の離島や、中部から北関東にかけての山間地域に散見される[6]。梶原集落においては、集落中央東寄りの山側に群倉が形成されている（**図-3**）。集落南端の家においては敷地近辺に単独で倉を配置している。平野の群倉も３棟程度であり、いずれも規模の小さなものであるが、近畿以西の内地においては唯一の群倉が確認された地域である。

3.2 利用法

基本的な収納物は焼畑による雑穀で、ヒエやアワなどの雑穀は穂摘みで収穫され、量の多いヒエなどは筵などを敷いた上に直接積み上げる形で収納した（**写真-1、2**）。好天時に収穫し、数日間屋外に干して乾燥した後にクラに収納する。週に１回程度クラから雑穀を取り出し、主屋の土間で乾燥・脱穀して調理した。板倉の内部は基本的に１室空間で、内部には解放された間仕切りが設けられることもある（**写真-3**）。

４．建築構法

4.1 構法の概要

石場建ての軸組構法で、柱間は貫で固められたうえ壁板が固定され、床高は比較的高く、屋根材はかつては茅葺きであったが現在はトタンや瓦葺きに改造されている。

床の高さについて、記録（文献２）では、高床のものと低床のものがあるとされているが、今回の調査では床高が大きく異なる事例は確認されなかった。

壁面の構成について、記録では、内張りの縦羽目板の側壁（文献２）と、柱に貫を通して横羽目板を落としたと形式（文献 1）が報告されている。今回確認されたのは、縦羽目板の形式がほとんどであるが、五家荘岩奥集落において１棟のみ横羽目板の落し板倉が確認された。梶原において壁・床・屋根を竹で作ったクラがあったとのことであるが、特殊な事例であろう。

仕口等の加工について、梁は全て京呂で掛けられており、室内部では十文字もしくは井桁状に渡り顎で組まれている。軒先部分では梁がそのまま外部に持ち出され、船枻造りの軒形式となっている。茅葺き屋根の叉首尻は、持ちだされた梁の上部に指される（**写真-4**）。大引[注5]材と柱との仕口は輪薙枘[注6]となっているものが多い（現地の仕口名称不明）。大引の材を五平[注7]に使い、柱に枘差したうえで材の両端を鬢太[注8]で伸ばした仕口であり（**写真-5**）、クラに用いられるが主屋において使用されることはない。他地域においては見ることの少ない仕口であるが、八丈島の高倉「オクラ」の足固めや、奄美大島の住戸「オモテヤ」等や祭場の小屋「アシャゲ」の足固めの仕口に多用されている。

4.2 使用木材種と木材の準備

主屋と付属屋では使用される木材種やその加工法が異なっている。近世の相良藩においては森林収入が藩政の支えとなっていたため、23 種の木を御用木[注9]に指定し、その伐採には厳しい制限が加えられていたことから、使用可能な木材は限定されていた。明治以降は木材の使用に関する制限はなくなった。

主屋においては柱にはスギが多く用いられ、ヒノキが用いられることはなかった[注10]。梁組より上の材にはアカマツ、水に濡れる恐れのある外周部や水回りにはカヤノキが用いられた。クラに使用する材については特に決まりはなく、建設時に入手可能な材により建設した。雑木や古材を利用することが多く、樹種も様々である。板材としてはスギが多く用いられており、最近はモミも用いるようになっている。現存する板倉の使用樹種を特定することは困難であるが、大引材において広葉樹が用いられている点は共通していた。

建築物に使用する材は何年も前から伐採しておき乾燥させた。山中においてハツリヨキで角材に整え、材木や炭を運ぶためのキンマミチを通って人力で搬出した。梶原では耕作に牛馬を用いることが

表-2 明治35年の五木村の地目別土地利用面積

地目		面積(ha)
宅地		21.9
耕地	田	6.3
	焼畑	2,288.5
	常畑	99.2
山林等	山林	1,654.5
	官有林	1,722.8
	原野	348.7
	その他	3.1
計		6,145.0

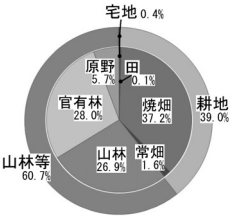

図-2 明治35年の五木村の地目別土地利用の割合

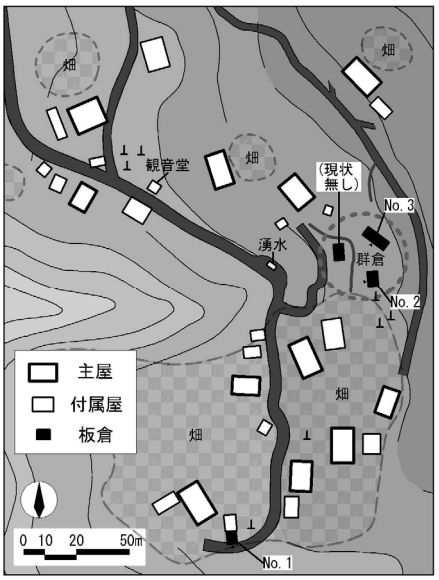

図-3 五木村梶原集落の板倉の立地と集落構成

写真-1 板倉 No. 3 内部のアワの保存状況

写真-2 板倉の天井に下げられたアワ穂

無く、飼養している家が少なかったため、牛馬による搬出は行なわれなかった。ヨキやワキノコ等の製材道具は各家で所有しており、搬出や製材も自ら行なった。かつての屋根葺き材はススキであり、焼畑とは別の場所に集落共同のカヤノを持ち、毎年火入れをするなどの管理を行なっていた。

4.3 木材の加工と建設

製材や木材加工は基本的に住民が自ら行なう。板の製材なども初めの切り込みだけは集落内の器用な者が行なうが、その後は雨天時などの仕事の合間に住民が自ら製材した。

主屋の建設時には大工に作業を依頼したが、クラの建設に際しては余った材などを利用して住民が自ら建設した。加工が困難な部分のみを他人に依頼した。寸法について特に決まりはなく、実測結果からも建築規模や基本寸法に関する傾向は認められなかった。

基礎石には上部が丸もしくは尖った石を選ぶことで上に乗る柱が移動しにくくし、また雨で濡れた際にも水が抜けやすいようにした。

屋根は当初は叉首構造の茅葺きであり、屋根葺きは皆[注11)]に頼んで食事を提供することにより行なった。主屋の屋根を葺くのには1週間程度の期間が必要であった。

4.4 クラの構法の実例

板倉 No.1　五木村梶原（図-4、写真-6）

床高 713 ㎜の高床であり、軒の船枻の持ち出しや、足固めの仕口などの当初の形式をよく残している。当初は茅葺きであったが、トタン葺きに変更されている。他の板倉と異なり、縦羽目の壁板が貫に屋外から釘打ちされている。室内の３本の柱は大引上に建てられ貫で連結されるが、壁板は張られていない。構造上不要な柱でありその用途は不明である。柱はスギ、梁はマツで大引材は広葉樹。柱と大引との仕口は全て輪薙枘となっており、丸込栓により固定されている。

板倉 No.2　五木村梶原（図-5、写真-7）

内部が２室構成になっており、濡れ縁をもつ前室と奥の部屋に分かれているが、建具による仕切りは無い。梶原の群倉内に残された２棟のうちの１棟。梁桁材や壁板に転用材が多く用いられている。大引材は広葉樹であるが柱・梁材には各種の材が混用されている。柱と大引の仕口は全て輪薙枘となっている。

板倉 No.3　五木村梶原（図-6、写真-8）

内部の詳細は不明であるが、通路状の前室と両脇の収納室２室で構成されている。内部に貯蔵されたヒエが残されており、かつての貯蔵法が確認された。構造形式は No.2 と同様である。

板倉 No.4　五木村白蔵（図-7、写真-9）

唯一茅葺きの形式を残すクラ。移築により床・壁面が撤去されるなど改造が激しく原状は不明であるが、叉首構造の小屋組の形式を確認することができる。

板倉 No.5　五木村白蔵（図-8、写真-10）

比較的近年の建設と考えられ、垂木掛けの痕跡が残ることなどから当初からトタン葺きもしくは瓦葺であったと考えられる。昭和 50

写真-6　板倉 No.1 外観

写真-7　板倉 No.2 外観

写真-3　板倉 No.6 室内部の仕切り

写真-4　板倉 No.3 茅葺き屋根の叉首の納まり

写真-5　板倉 No.5 足固めの輪薙枘の仕口

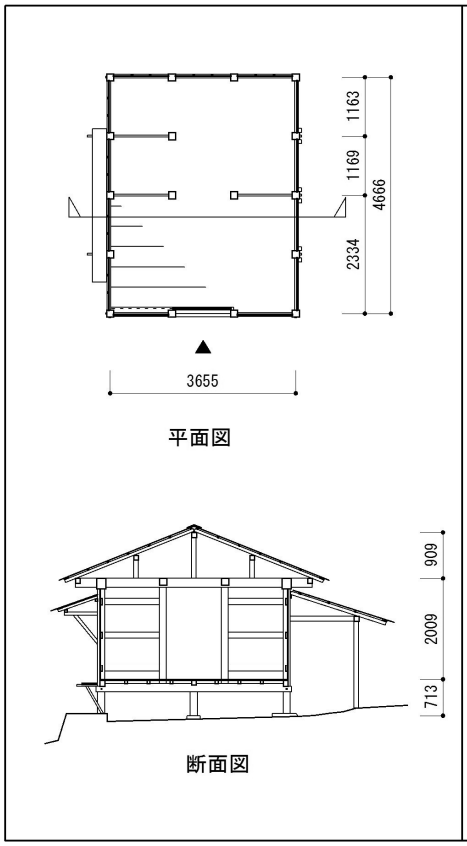

図-4　板倉 No.1 平・断面図

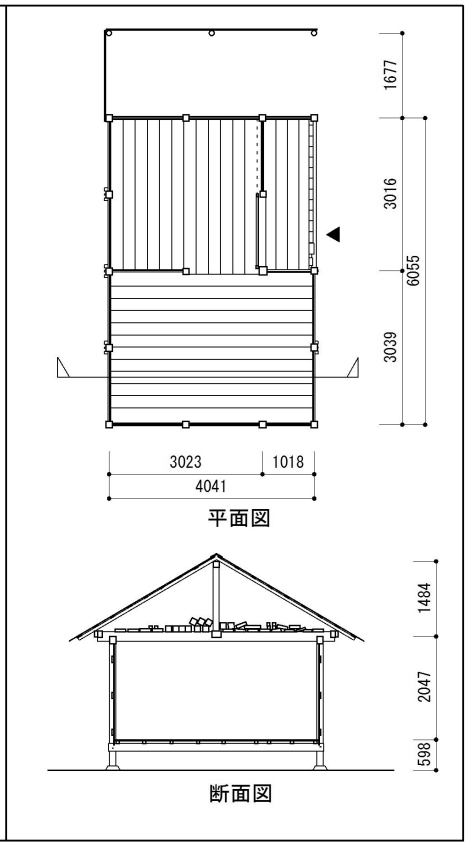

図-5　板倉 No.2 平・断面図

年に改造を行なった旨の墨書が残る。柱や足固め材にはスギが多く用いられている。

板倉 No.6　五木村平野（図-9、写真-11）

平面形は正方形に近く、かつては茅葺きであった。室中央の柱は基礎石から梁まで伸びる通し柱となっており、また足固めの仕口に輪薙枘が用いられていない点も他の板倉と異なっている。室内の貫には壁板が張られ、内部を緩やかに区切っている。柱と梁の構成、壁面の設置法など、全体的に波照間島の板倉と類似している。

５．まとめ

熊本県山間地域の五木村の板倉について、その特徴的な建築構法と利用法、立地形式を記録し報告した。また、大引の仕口に関しては八丈島や奄美大島との類似（４事例）、梁組の構成に関しては波照間島との類似（１事例）が確認された。生活の実状を示し、特徴的な構法を残存していることの多い付属建築物は、記録されることもなく姿を消しつつある。地域文化の理解と継承のために付属屋を含めた地域資源の再確認と記録の作成が急務となっている。

参考文献

1）石原憲治：五家荘より椎葉へ,民俗建築 第４号,pp.2-17,1952
2)野村孝文:南西諸島の群倉,日本建築学会論文報告集 第66号,pp.589-592,1960.10
3）熊本県教育庁文化課：五家荘の民俗－泉村民俗資料緊急調査報告書－熊本県文化財調査報告　第14集,熊本県教育委員会,1974
4）川島宙次：滅びゆく民家　屋敷まわり・形式,主婦と生活社,1976
5）五木村総合学術調査団：五木村学術調査-人文編-,五木村役場,1987
6）安藤邦廣：小屋と倉,建築資料研究社,pp.72-75,2010

注

注 1）五家荘と椎葉村はいずれも平家の落人部落の伝承をもつ。また五木村と五家荘は民俗的に類似しているとされている（牛島盛光：日本の民俗 熊本,第一法規出版,1973)。
注 2）各集落における板倉の所在確認に加えて、梶原集落の板倉所有者と、板木集落の大工経験者に詳細な聞取り調査を行なった。
注 3）聞取りによるとヒエ,アワ,ムギ,アズキ,ダイズ,ソバを生産していた。
注 4）文献 5）の記載をもとに作成。明治 35 年における自村民所有の地積。
注 5）現地名称では「ウツオ」と呼ばれる。
注 6）輪薙枘[わなぎほぞ]：川字型の枘をいう。川字型の内、中央を枘差、両脇を輪薙込とする仕口。(日本建築辞彙 新訂、中央公論美術出版、2011)
注 7）五平[ごひら]：長方形断面の材。この材を扁平に使うとき、「五平に使う」もしくは単に「平に使う」という。(建築大辞典第２版、彰国社、1993)
注 8）鬢太[びんた]：鬢面[びんずら]ともいう。木口の一部を残して他を欠き取った場合、残された部分をいう。(建築大辞典 第２版、彰国社、1993)
注 9）文献 5）p.987 によれば、御用木とは杉,桧,松,樅,槻,柏,桐,ちしや,塩地,桂,桑,赤樫,白樫,楝,こが,たぶ,榎,楠,枇杷,槇,椹,朴,竹、を指し、屋敷内の木や枯れ枝であっても伐ることができなかった。
注 10）聞取りによると、ヒノキの柱は「ヒバシラ（火柱)」とされ、建物に使用してはいけないとさていた。
注 11）参集範囲は不明。

本報告は科研費（若手 B、課題番号 23760599）による。

写真-8　板倉 No.3 外観

写真-9　板倉 No.4 外観

写真-10　板倉 No.5 外観

写真-11　板倉 No.6 外観

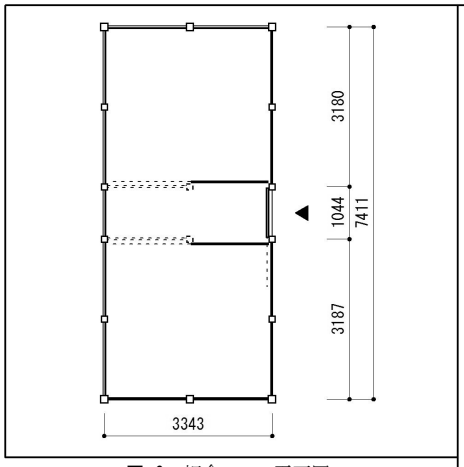

図-6　板倉 No.3 平面図

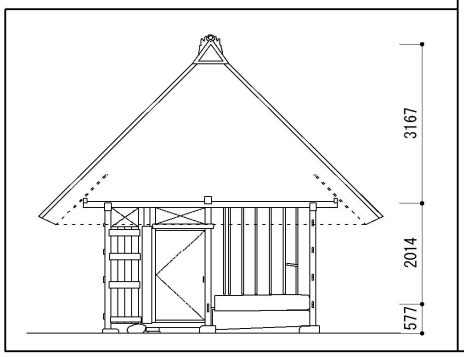

図-7　板倉 No.4 立面図

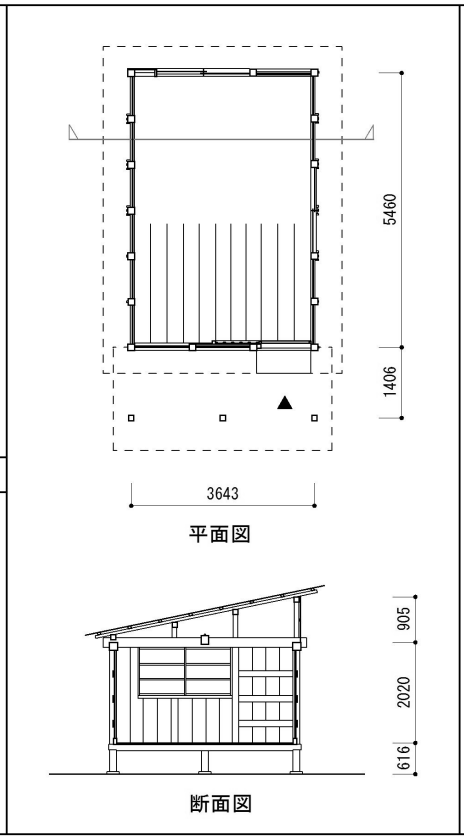

図-8　板倉 No.5 平・断面図

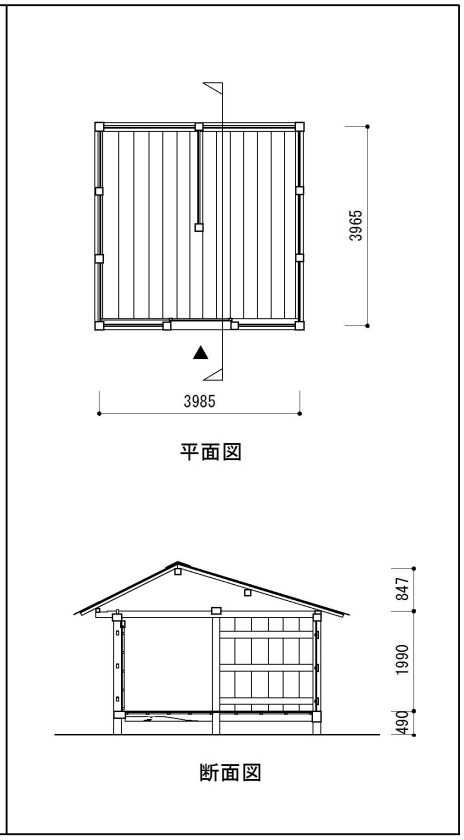

図-9　板倉 No.6 平・断面図

［2012 年 10 月 16 日原稿受理　2013 年 4 月 1 日採用決定］